孤愁和泉式部

川口松太郎

孤愁和泉式部

川口松太郎

孤愁和泉式部（こしゅういずみしきぶ）

昭和五十六年一月二十八日　第一刷発行

著　者　川口松太郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）／振替東京八―三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂
定　価　一二〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
© Matsutarô Kawaguchi 1981, Printed in Japan

0093-168937-2253（0）　（文1）

目次

海を眺める女　7
岬まで　143
入江のどんど　221
あとがき　256

裝幀＝朝倉 摂

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

海を眺める女

海を眺める女

一

五時十分になると、湾の向う岸のセメント工場で終業の鐘が鳴る。教会の鐘のようにおだやかな鳴り方で、その音は湾沿いのドライヴウェーではなく、湾の水面を直線に渡ってくる。湖のような水面をゆっくり渡ってきて、こちら岸に上陸してから暫く町の家並みの上をさまよったあとで消える。

それから十四五分もすると、工員たちがこの小さい喫茶店にはいってくるのである。

志奈は海の見える、しかし場所としてはこの店のなかでもべつにいいとはいえない片隅に坐って、はいってくる工員や事務員たちを眺めている。

セメント工場に働く人々は、会社をでてくるとき、皆こざっぱりした外出用の身装(みなり)を整えてくるが、一人一人がどことなく噎(む)せっぽいようなセメントの臭いを、その服の襞や頭の髪の毛のなかから発散していた。

女は白地に水玉のブラウスや、その上に紺やグレーのセーターを羽織っているときが多かった。たまにワンピースを着ているときも、黒かグレーの目立たないものをつけている。痩せて

はいるが骨太のがっしりした身体つきをしている。もう五十歳を越しているらしいのだが、年齢よりも老けているとか若いとかいうのでなく、数字で数えることのできない種類の年のとり方をしている、と志奈は思う。なんとなくほかの人より際立つのもそのせいであろう。

女のセーターやブラウスからもセメントの埃っぽい臭いがこぼれ落ちていそうである。その臭いに志奈は、女の職場の労働の臭いという懐かしさ、身近さを感じていた。

女は大概、一番早くはいってくる四五人のグループのなかにまじって店にはいってくる。そのグループとは何の関りもなく一人で席をとるが、最初のグループのなかにいない日は、女はもうこの店には現れないのだ、ということも、志奈は長いあいだに知った。

それはこの店が小さくて、少し客がはいれば忽ち席がふさがってしまうからであったろう。女の席は、海とは反対側のコカコーラの空箱などを積んである物入に近い隅に、一人分だけついている、いわば予備の席のような所である。そこ以外のところに坐っているのを見たことがない。その席が空いていなかったら、多分女は店にはいらないで帰るのにちがいない。そこなら、誰ともまともに近々と顔を合せることなしに、いつまでも坐っていられる。

店にはいってくると、その席までまっすぐに進んでいってくるりと身体の向きをかえて坐る。そこからは正面に、この小都会のある平野の東に連なる山脈が、屏風を立てたように眺められ、季節によってその肌の色を変えた。コーヒーが運ばれてくると、女は一杯のコーヒーをいかにも愛しむように厚手の茶碗を両手に包み込んで、うすら寒い雨の日などには茶碗の温み

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

を守るように抱いて暫くじっとしている。雨に煙る東山の峰々に見るともなく眼を向けている。今日一日の自分の暮しをじっと思い返し吟味するように眼を伏せている日もある。それからゆっくりミルクを入れ、砂糖を二匙掬って入れる。それを静かに掻き廻すあいだも、眼は伏せられていて女の思いは途切れることはなく続いているように見える。

最初の一口を少量ふくんでから眼をあげ、女は山脈を眺めた。店構えの粗末さ、雰囲気のなさの割には、意外に香気が高く、味にこくがある。その味を舌の上にころがせながら、女は山肌を眺める。

腰の強そうな、生え際の濃い髪の毛に、白いものが目立たないほどに混っている。その髪のなかや、セーターの編み目のなかまで、眼に見えないセメントの粉塵の溜るような職場での長い一日の終ったあとで、この一杯のコーヒーを味わうことに生きる喜びのいっさいがあるように、そんなふうにさえ見えるほどの安らぎがその姿にはあった。

女がそこにそうやってコーヒーを飲んでいる、それが志奈にも今日一日が終った、という安堵になった。そこにどっしりと憩うているのは過去というものであった。女の過去について志奈は殆ど知らない。しかし腰の強い髪が生え際から濃く、そこに白いものさえまじっている女の、表情というものが浮ぶことは滅多にない眼のなかには濃い過去があった。いや、女が、女の全体が過去そのもののようであった。どこか、芯の芯までひんやりとしている。

志奈もそこでは一杯のコーヒー茶碗を両手に包むようにして、長いこと海の方を向いて坐っ

ている。茶碗が冷えて、逆に掌の温みでもって茶碗の肌を暖めるほど長く坐っている。女には斜めに背を向けている位置であった。志奈はしかしいつも背中で注意深く女を見ていた。

女は自分以外の誰にも注意を払ってはいなかった。自分とだけ向き合っていて、それだけで充実している。志奈がどうしても女から心を離せないのは、その充実感のためであった。外の世界に注意を払ったり、求めたりしようとはいっさいしていない、思い切ったその無関心ぶりであった。

初めて女に逢ったのは、海岸通りの埋立地の遊歩園であった。あのひとですよ、私が描きたいなと思って、頼んでみたけど見事断られてしまったのは……。志奈の店の絵の仲間の一人である近藤廉吉がそういって教えた。女の方をちらと見た眼を伏せてからそういったのである。反対側の通りを、女はどこか海の上の遠くの方を眺めながら歩いていた。酔狂な絵描きのことなど忘れてしまっているか、あるいは憶えていても挨拶などする気はないのだ、と感じさせる無関心さが、女の身体の周りを濃く包んでいた。芯の芯まで冷え冷えした女に見える。

遊歩園などと名はついていても、そこは人々が通勤や所用のために忙しく通ってゆく海沿いの道路であった。女も工場から退けた人々の波のなかを帰ってゆくところである。

幾組かの客が入れ替り、山脈が紫紺に暮れてくると、志奈は留守番を頼んだパートタイムの家政婦の帰る時間のきたことを思いだす。女はそのときいつもまだ残っている。志奈は心を残して店をでる。

家政婦の休みの日に、志奈は遅くまで店に残っていたことがある。女はサンドイッチとサラダをたのみ、志奈も同じものをとった。近藤廉吉も女がどこに住んでいるのかは知らなかった。女が店をでてゆくのを見送ってやって志奈は満足し、あとを追おうとは考えなかった。女に家族があるとは、志奈にはとても考えられない。自分と同じように、多分、女も一人っきりで住んでいるのにちがいない、と思う。女の身体から滲みでている冷んやりしたものが、志奈にそう信じさせた。

志奈の小さい店は海に注ぐ大きな川の岸にあった。工場が川沿いにはないありがたさで水は澄んでいる。朝と夕方の干潮時には川の半ばが砂原を現わして蜆貝を掘る人々が見えた。その日、店に帰ってゆくと、すっかり帰り支度を整えた家政婦が、お客様ですよ、というのであった。

客だ、と特にいうときは店の買物客のことではない。そうお？　と訊ねる眼になって志奈は奥の茶の間への通路になっている細い土間をのぞいた。

東京のお宅から、と家政婦がいった。東京のお宅？　いったい誰がそんな言葉をつかったのであろう。そんなものはもう自分にはないのに……。手染の藕絹染の暖簾をかけた奥に、男の靴が脱いであるのが見えた。ドキンと志奈の胸に応えるものがあった。顔色が変った、と自分

で思う。家政婦の方を志奈が窺うのと、家政婦が眼をそらすのが同時であった。それでは失礼します、とさりげなくいって、家政婦は志奈の顔を見ないようにして帰っていった。

閉店時間にはまだ早いが、志奈は手早く店の大戸を閉めた。戸をしめることによって、世間というものとのあいだにぴたっと遮蔽幕を下ろさないではいられないものがあった。

戸を閉めた店のレジの前に腰をおろした志奈は、宙をみつめてじいっとしていた。糊で貼りつけられたようにもう腰が上らない気がする。あの靴の存在がこの小さい志奈の店をがっしりと踏んまえてしまった。砂が崩れるように、音もなく、絶えまなく崩壊する気配が内部にある。それに耳を澄して志奈は坐っていた。

こぢんまりした店のなかを眺め廻して見る。袋物だけを、それも極く限られた一つの趣味に統一して扱っている。皮革製品も布製品も竹製品もあるのだが、全体としては渋い色調になっている。そしてそれらが、所々、店の壁面を埋めている油画の額と一つの調和をつくりだしているところに、ささやかな志奈の店の特徴があった。

小さい飾窓に藺草のバッグと取合せに、打紐の帯〆を並べてある。手づくりの打紐の帯〆は安価ではない。それでも作るそばから待ちかねているお得意があって、忽ち売れてしまう。せめて十日間ウインドウに飾らせて下さい、と頼むのだった。せっせと作る体力も気力もなかったので収入としてはだから大したことはなかった。自分の技術で店の特色を出している、ということで、生きる手応えにはなっている。

気が向けば店番を兼ねて、一日紐を打っている。しっとりと冷たい絹糸の一本一本をよく揃え、力をこめて打ってゆくと、渋い底光りのする艶の、しなやかでいて固く緊った、弾力のある紋様がつくりだされてゆく。亀甲、市松、立涌、矢羽根。辛気で忍耐を要する作業であったが、打っている間はよそ事を思うことが許されないのがいい。指先と肩に、均等に流れる力を維持しながら一心に打ってゆく。力の流れのむらは必ず糸にでる。絹糸の一本の乱れも赦されない。

この店の、何が崩壊するというのか？　何に自分は怯えているのか。あの靴！　志奈は横眼づかいで靴を見た。その靴の主はひっそりとしてまるでいないように物音も立てない。しかしあの靴はそこにあった。店を覆うように大きなあの男靴が消えずにそこにある。いつまでもぐずぐず時を稼いでいてもその靴が消えるはずはなかった。逢いたくないという志奈の気持がわからないはずはない。それは東京をたつときすでに男にはわかっていたはずである。

そこまで思ってきて志奈は立上った。軽い足音を立てて茶の間への通路を歩いてゆき、藤縞染の暖簾をさっとあげた。男はそこに悠々と坐っていた。ゆとりのある、眼だけが笑いかける顔で志奈を見上げた。

大分、ごゆっくりでしたな、とでもいっている眼であった。あの無意味な時間稼ぎのあいだの志奈の考えたことのいっさいがわかっている、という眼でもある。志奈はにこりともせずに男を見つめていた。

——怖い眼だね。

男は初めて声を出した。

(なにしにきた、いまごろ……というわけだろう？　わかっているさ、わかっているけど仕方がなかったのさ)

男の言葉にしないことまで志奈には聞えた。突立っている志奈を見上げて男はいった。自分の方がこの家の主人であるかのように。

——まあ、坐ったらどう？

男は四十歳には一つ二つまだ間のあるはずだ、と志奈は自分の歳から逆算して思った。鼻の長いおだやかなコリーをつれている二十何歳の学生の彼が、眼に甦ってきた。あれから二十年近く経ったのであった。

——何をやったんですか、あなた……

昔と同じにあなたと呼んだのは、もう癖になっていたからである。男は志奈を一度も義母(かあ)さんと呼んだことはないが、志奈は男のことはずうっとあなたと呼んできた。

——援けて貰いたいんだ。

男はテーブルの上に置いた自分の手に眺め入りながら低い声でいった。

——どうにもならなくなったんです。

——株ですか？

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc